〈論　説〉

アテナイ・ポリスの祝祭(二)

白石正樹

目　次

はじめに
一　アテナイの春の祝祭
二　アテナイの夏の祝祭（年末）
三　アテナイの夏の祝祭（年始）　（以上前号）
四　アテナイの秋の祝祭　（以下本号）
五　アテナイの冬の祝祭
おわりに

四　アテナイの秋の祝祭

ボエードロミオーンの月の祝祭――二日、ニケーテーリア祭。五日、ゲネーシア祭。六日、アルテミス・アグロテラの祭（カリステーリア祭）。七日、ボエードロミア祭。九日、パーンの祭。一二日、デーモクラティア祭。一五日～二二日、エレウシスの秘儀祭（アテナイにて「アギュルモス」、「ハラデ　ミュスタイ」、「ヒエレイア　デウロ」。そして一八日の「エピダウリア」の後、エレウシスへの大巡礼「ポンペー」、二〇日～二一日秘儀加入儀式「テレテー」、「プレーモコアイ」）。

ピュアノプシオーンの月の祝祭。――五日～六日、プロエーロシア祭。六日、オスコフォリア祭。七日、ピュアノプシア祭。八日、テーセイア祭。九日、ステーニア祭。一〇日、ハリムスでのテスモフォリア祭。一一日～一三日、テスモフォリア祭（「アノドス」、「ネステイア」、「カリゲネイア」）。三〇日、カルケイア祭（アテーナー・エルガネーの祭）。日付不明、アパトゥリア祭（「ドルピア」、「アナリューシス」、「クーレオティス」の三日間）。

ニケーテーリア祭（Νικητήρια, Niketeria）はボエードロミオーンの月の二日に行われた。[1] ニーケー（Νίκη）は「勝利」（戦闘における勝利、競技における勝利）の意で、その擬人化された有翼の若い女神である。ニーケーはアテーナーに付属する神々の一人と見なされたし、それを形容辞とするアテーナー・ニーケー（＝勝利女神）の祭祀が生まれた。パンアテーナイアの競技会が発達した前五五〇年頃には、アクロポリスの西側入口付近にアテーナー・ニーケーに捧げられた祭壇があった。[2] その後、ニーケーはとくにペルシア戦争の勝利によって人気を増大させた。アクロポリスの西側プロピュライアの右に立つアテーナー・ニーケーの神殿はおそらく前四四九年のペリクレスの建設計画に沿って、前五世紀後半に建てられたものである（c. 425-420 B. C.）。この小さなイオニア式神殿の周囲を巡っているフリーズのうち東側正面は神々の会議（戦いの結果の協議）を表わし、他の三面は戦闘――とくに南側フリーズはマラトンの戦いと思われるギリシア人とペルシア人の戦闘を描いている。[3] 前四四八年頃の法令によって、アテーナー・ニーケーの女性神官は伝統的な神官職の家系からでなく「全てのアテナイ人女性の中から」（ἐκ τῶν Ἀθηναίων

Hana［gōr］）抽籤によって選出されることになった。そして、女性神官は五〇ドラクマの年俸とともに犠牲獣の脚肉や獣皮を受取るとされた。[4]

また、ゲネーシア祭（Γενέσια. Genesia）はボエードロミオーンの月の五日に行われた。これは戦没者を追悼する国家の式典である。ゲネーシア祭はその名称からして元は貴族的氏族に属しており、別々に彼らの私的な墓所で行われたと思われる。しかし、ソロンの立法によって国民的儀式として定められ戦没者追悼の記念日となった。このようにして貴族的氏族を制御し、その慣行を共同体のための機能へと改変することは、立法者ソロンの政策と一致していた。[5] ゲネーシア祭を別にすれば、アテナイ人の死者を追悼する公的式典についての確かな証拠はない。私的には諸々の家族は、縁者の命日に供物をもってその墓へ行った。そして、ポリスは僭主殺しハルモディオスとアリストゲイトンへの奉納やマラトンの戦いの死者のような英雄化された者への祭祀を除き、私的な儀式にはかかわらなかった。ところで、アテナイの戦没者追悼の式典がどのようであったかを、われわれはトゥキュディデスの次のような記述からある程度想像することができる。――「葬儀の行われる二日以前に式幕を張った霊壇に戦死者の遺骨をまつり、遺族の者たちはそれぞれ心ゆく捧げものを供える。埋葬のときがくると、葬儀の行列は、部族べつに一つの糸杉の霊棺に遺骨を収め、これを車にのせて引かせていく。亡き者はみな自分の部族の者たちの骨と共に収められるのである。さらに、被いのかけられた棺架が、空のままこれに続いて運ばれていく。これは行方不明となって屍体の収容されなかった戦死者たちのためである。葬儀の列に加わりたいものは、市民、他国人のべつなく許される、また遺族の女たちは墓地にあつまって追悼の嘆きをあげる。行列は国家の墓地につくと霊棺を安置する。墓地はポリスの郊外のわけて美しい場所にあって、戦いのたびに命を捧げた者たちが此処に埋められている。……霊棺が土で被われてしまった後で、戦死者にふさわしい讃美の言葉が述べられる。これを述べる役割は、識見一きわすぐれ、市民の高い尊敬を受けている者のなかから、ポリスがえらんだ人間に与えられる。これが終わると、参列者は帰っていく。[6]」これは続いて有名

なペリクレスの追悼演説を紹介するための国葬場面の描写であり、ペロポネソス戦争開始の年（前四三一年）の冬のことであるので、例年のゲネーシア祭と同一視することはできない。それに平和時では、ゲネーシア祭は公的葬送のための同一の素材をもたずに営まれたであろう。しかし、この描写のなかに、アテナイ・ポリスの威厳のある公的哀悼と抑制された私的参加とを伴う、一つの均衡のとれた儀式を見ることができる。[7]

次に、アルテミス・アグロテラ（Agrotera＝狩場に坐す）の祭、またはカリステーリア祭（Καλλιστήρια＝「感謝祭」の意）が、ボエードロミオーンの月の六日に行われた。[8] アルテミス・アグロテラの神殿はアテナイの城壁の外を流れるイリソス川の対岸アグライに立っていた。伝説によれば、その地はアルテミスがその誕生の地デロス島を離れた後、最初に狩に従事した場所であったという。アテナイ人は前四九〇年のマラトンの戦いに先立ち、六日（＝アルテミスの月例の祭日）にアルテミス・アグロテラに戦勝を祈願した。[9] そのとき、彼らが殺したすべてのペルシア人の数だけ、女神に雌山羊を捧げると誓ったとされる。ヘロドトスによれば「このマラトンの合戦において戦死者の数は、ペルシア方が六四〇〇、アテナイ方は一九二であった。」[10] アテナイ人は誓願の数に達する十分な雌山羊を見つけることができなかったし、仮にそうした場合、その数はアッティカの山羊の全個体群を破壊するおそれがあるほどだった。そこでアテナイ人はあらためて毎年アルテミス・アグロテラの祭に五百頭の雌山羊を捧げることを誓った。この感謝のための供犠は、百年後のクセノフォンの時代にも続けられていた[11]（むろん、毎年の犠牲獣の総計は一三年目にはペルシア人戦死者数を超えていたが）。雌山羊がホロコーストされた形跡はないから、それはまた数千人のための山羊肉の宴会を意味したに違いない。この祭はマラトン戦勝記念祭としてポレマルコス（軍事長官）が監督した。この日、訓練中のエフェーボイがアルテミス・アグロテラの神殿まで隊列を整えて行進するパレードがあったと思われるし、彼らもまたそれに続く宴会に参加したであろう。[12]

また、ボエードロミア祭（Boedromia）がボエードロミオーンの月の七日に行われた。それはアポローン・ボエー

ドロミオス（＝早駈け加勢の）の祭祀である。この時期は従軍する季節の終了に当っており、戦争において救助した神としてのアポローンへの一般的な感謝祭を行うのにふさわしかった。デモステネスの言及によって、この日ある程度の規模の民衆の参加する行列のあったことが知られているが、非常に大きなものではなかった。[13] ギリシアの他所でもボエードロミオスの称号やボエードロミオーンの月名が見られるから、おそらくこの祭はアテナイに限らない。[14] しかし、アテナイ人はこの祭にイオーンやテーセウスの伝説を結びつけた。対エレウシス戦争の時には、イオーンがアテナイ人の救援に駈けつけ勝利をもたらした（エレクテウスの娘クレウサとクストスとの間にできた息子イオーンは、ときにはアポローンの子とされる）。[15] また、プルタークによれば、アマゾーン族のアテナイ侵入の時には、テーセウスはアポローンに犠牲を供えた後アマゾーン軍に切り込んでいったという。[16]

また、パーン（Πάν, Pan）の祭は、ボエードロミオーンの月の九日に行われた。[17] 牧神パーンはアテナイではアクロポリス北西斜面の洞窟に祀られ、例年パーンのための供犠と松明競走が催された。そのきっかけは、ペルシア戦争のとき伝令ピリッピデス（Philippides）がアテナイに次のような報告をもたらしたからである。――ピリッピデスは飛脚を業とする健脚家であって、マラトンの戦いに先立ってアテナイからスパルタへ救援を求めて派遣された。彼が二日間走り続けてテゲア付近に聳えるパルテニオン山の辺りにさしかかったとき、牧神パーンに遭遇した。パーンがいうには、自分はアテナイ人には好意をもっており、すでにこれまでもたびたびアテナイ人のために尽してやった。今後もそのつもりであるのに、アテナイ人が一向に自分のことをかまってくれぬのはどういうわけか。そこでアテナイ人は、マラトンの戦いの後ピリッピデスの言葉を信じてパーンを祀り、この神の顕現の日に松明競走を催した。[18]

次に、デーモクラティア祭（Democratia）はボエードロミオーンの月の一二日に行われた。アテナイ人はこの日、前四〇三年に亡命「民主派」が帰還したことを祝って「エレウテリア（＝自由）への感謝祭」（χαριστήρια ἔθυον ἐλευθερίᾳ）を催した。[19] その後まもなく、この祭はデーモクラティア祭と同一視された。デーモクラティア祭とは、

デーモクラティア――民主制を表す抽象名詞――を擬人化した女神の祭（「デーモクラティアへの供犠」）である。[20] 例えば、アゴラの西北隅の「ストア・バシレイオス」の近くに、ゼウス・エレウテリオス（＝自由護持の）の像と「ゼウスのストア」（列柱館）があったが、その館内の壁には十二神の絵画が架けられ、その反対側の壁にはテーセウス（英雄）とデーモクラティア（女神）とデーモス（市民団）を結びつけたエウフラノール（Euphranor）作の有名な壁画が描かれていた。[21] また、ブーレー（評議会）はかなり以前からデーモクラティアに供犠を捧げていた。[22] その後、前三三〇年代に――おそらく民主制の将来に対する不安が動機となったと思われるが――デーモクラティア女神は一時特別に沸き上がる関心を引き起こした。前三三七／六年、エウクラテス（Eucrates）による「僭主制に反対する法律」が成立したとき、その法律を刻んだ碑文はデーモクラティア女神によって冠を授けられるデーモスを飾りレリーフとしていた。前三三三／二年にはデーモクラティア女神の大きな像がブーレーによってアゴラに奉納された。翌三三二／一年の皮革販売記録の碑文によれば、将軍たちによるデーモクラティア女神への供犠が行われ、その犠牲獣の皮は四一四½ドラクマの値段であった。[23] さらに、前三世紀後半にこの祭祀が存続ないし復活したときには、デーモクラティアの神官が現われ、またデーモクラティアを賛えるエフェーボイの参加する行列が見られた。[24]

さて、エレウシスの秘儀祭（Eleusinian Mysteries）――大秘儀祭（Greater Mysteries）という――はボエードロミオーンの月の一五日～二二日に行われた。初日は満月の日であるが、それより二日前の一三日に、エフェーボイが円形の楯と槍を身につけクラミス（騎兵用の短い外套）を翻してエレウシスへ出発した。[25] 翌一四日、彼らは「聖なる物」（τὰ ἱερά）を運ぶエレウシスの神官職の一行を、エレウシスからアテナイのエレウシニオンまで護送する任務につく。「聖なる物」は秘儀加入していない人々の視界から隠されていなければならず、それゆえ紫色のリボンで結ばれた円形の箱キスタイ（kistai）に入れて運ばれた。キスタイは女性神官たちだけで運びえたし、「聖なる物」自体も小さいものであったに違いない。[26] キスタイを運ぶ女性神官たちは国家によって支払われる馬車に乗った。エレウシ

スのトリアシオン平原の東側にレイトイ川（Rheitoi）があり、前四二一年頃アテナイ人はこの川に橋を建てた（ペルシア人によって破壊されたエレウシスの神殿の石を用いて）。その仕事を許可する法令は橋の幅を約一・五メートルと規定し、車から降りた女性神官たちが橋の上を歩いて「聖なる物」を運ぶようにした。[27] ヒエラ・ホドス（聖道）を通ってアテナイのエレウシニオンへ到着すると、二柱の女神（デーメーテールとコレー）像の塵払い役（Phaidryntes）として知られる役人が、アクロポリスの上のアテーナーの女性神官に「聖なる物」の到着を報告した。

秘儀祭の第一日は一五日で、「アギュルモス」（ἀγυρμός＝the Gathering）である。秘儀加入を求める人々は、アテナイのストア・ポイキレー（彩画柱廊）に集合することが必要であった。バシレウスの主催するその集会では「ヒエロファンテス」（Hierophantes＝聖なる事柄の顕示者。エレウシスの最高位神官で、エウモルピュダイ氏族出身）と「ダイドゥコス」（Daiduchos＝秘儀照明の松明持ち。エレウシスの神官職の第二位で、ケーリュケス氏族出身）の出席のもとに、秘儀参加を呼びかける正式の布告（προόρησις）がなされた。後代にはこの布告の役を担う「ヒエロケーリュクス」（Hierokeryx＝聖なる伝令）という特別の役人があった。布告は加入儀式への志願者が自ら申し出るべきことを告げるとともに、神聖冒瀆の罪がなくても参加できない者への禁止条項を含んでいた。それは志願者が流血の罪を犯していないことを挙げたが、またより精神的な適合性として、何らの悪も自覚しない魂をもち、十分に正しい生活をしていることを挙げた。年齢、性別、自由人か奴隷かに関係なく、認可される資格があった。非ギリシア人（特にペルシア人）に対する排斥があったかもしれないが、後代にはローマ人が受容れられているから、強調点はむしろ外国人であることよりも「明瞭な言説」（秘儀祭に参加して言われたことを理解し、もし必要ならば正しく答えられること、あるいはたんにギリシア語の能力）におかれていたかもしれない。多分ある種の登録簿が準備されており、志願者がすでにアグライでの秘儀祭で加入儀式を受けたかどうか確認されただろう。しかし、あまりにも多

くの人々がいたので志願者一人ひとりが諮問を受けたと想定することはできない。女神はそれに値しない者を罰するだろうとの宣告で、志願者は自己責任を負わされていた。[28] 加入儀式の費用はかなり高く、前四世紀後半には一人当たり全部で一五ドラクマ必要であった（およそ一〇日分の賃金に当たる）。それは神官や役人たちに対して支払われた種々の手数料からなっていた。[29] 加入志願者たちはアテナイ人だけでなく、全ギリシア世界からやって来た。また、すでに前五世紀にはスポンドフォロイ（spondophoroi）として知られる伝令たちが、ヒエロファンテスによって、予め祭を承認したすべての都市に派遣された。彼らはデーメーテールのための初穂奉納と公的代表団の派遣を求め、またエレウシスへの巡礼の旅の安全のために、メタゲイトニオーンの月の一五日からピュアノプシオーンの月の一〇日まで五五日間の休戦（σπονδή, truce）を宣言するように勧めた。[30] 不案内な他国人には、エウモルピダイ氏族とケーリュケス氏族のメンバーから供給されたミュスタゴーゴイ（Mystagogoi）が世話をした。しかし、かれらは加入志願者である新ミュスタイ（Mystai）を、団体としてでなく必ず個人として加入させることが規定されており、違反した場合には罰金に処せられた。[31]

秘儀祭の第二日（一六日）は、「ハラデ　ミュスタイ」（ἅλαδε μύσται＝Seaward, Initiates）すなわち「海の方へ、加入者よ」である。これは「エラシス」（ἔλασις＝乗車）とも呼ばれる。初日の布告による警告だけでは十分でなく、ミュスタイには祭式的洗浄という積極的行為が、秘儀の畏怖すべき経験に先立って必要とされた。その浄化の方法は、最寄りの海岸での塩水浴、および犠牲獣（仔豚）の血の散布であった。[32] 彼らは早朝に、エピメレータイ（監督役）の取り締まるアテナイの一つの門から四輪馬車や二輪馬車に乗って出発し、ペイライエウスあるいはパレロンの海岸へ向った。海岸では仔豚を運びながら水のなかへ歩きださなければならなかった。三ドラクマ相当の仔豚は納入された手数料の返還部分として予め当局から供給されていたが、ミュスタイには自分自身とともに仔豚を塩水に浸して、それを浄化する責任があった。アテナイに戻ってから、各ミュスタイは自分の仔豚を犠牲にし、その血を散布

した。なお、その日の夕方は子豚料理を食して過ごしたと想像される。[33]

秘儀祭の第三日（一七日）は、「ヒエレイア　デウロ」（*ἱερεῖα δεῦρο*＝Hither the Victims）すなわち「犠牲をこちらへ」である。この日は特に二柱の女神に犠牲を捧げて、ポリスのために祈願する国家供犠の日であったと思われる。[34] 秘儀監督者であるバシレウスは、彼の二人の補佐役（パレドロイ）と四人のエピメレータイを伴って、アゴラの上方でアクロポリス北西の麓にあるエレウシニオン――ここに「聖なる物」が預けられ安置されていた――を訪れ、各ポリスからの代表団やアテナイ人民の面前でデーメーテールに犠牲を捧げ、父祖の慣習に従ってアテナイのブーレーとデーモスのために、また婦人と子供のために祈った。それから、各ポリスの代表団が交代で犠牲を捧げ、彼らの都市と市民のために祈った。[35] この日、おそらく敬虔な私人たちも自分の個人的な奉納をなすことができたであろう。

秘儀祭の第四日（一八日）は、ミュスタイが主に室内で過ごす休息の日、そしておそらくかれらがミュスタゴーゴイから間近にせまった加入儀式ための教示を受ける日である。[36] この空白日ともいうべき日（一八日）に「エピダウリア祭」（Epidauria）――医神アスクレーピオスの祭祀――が挿入されている。この祭祀は前四二〇／一九年にエピダイロスからアテナイに導入されたもので、新しい宗教として（バシレウスでなく）アルコーンにより監督された。それは神の最初の来臨を再び演じる行列、供犠と奉納、そして宴会を伴った。さて、アスクレーピオスは大秘儀祭の最中にアテナイのエレウシニオンに迎えられ、彼自身の神殿が建てられるまでデーメーテールの聖所に泊った。これは明らかにエレウシスの神官職の承認と協力によるものである。また、六カ月の間隔をおいて都市ディオニュシア祭期間に挿入されたもう一つの祭――アスクレピエイア祭――を含めて、医神の二つの祭祀の設定は、アテナイ当局と神官職との一致した意識的計画を示唆している。やがてこの神の到来は神話へと作り上げられたが、それによるとアスクレーピオスは彼自身の地上での生涯において、秘儀加入を求めてアテナイにやって来た。しかし、遅れて四日目に到着した。人々は彼の利益のために特別に準備的儀式を行い、この先例は、遅れてやってきた他のいかなる加入志願

者のためにも第四日に便宜を与えうるという神秘的正当化を提供した。[37]

秘儀祭の第五日（一九日）は「ポンペー」（πομπή）すなわちエレウシス詣の「大巡礼」（the great pilgrimage）の開始で、アテナイでのこの祭事はクライマックスに達した。「聖なる物」はいまや大勢の人を伴ってエレウシスへの帰途につく。早朝、コスメテース（壮丁教育の監督官）によって準備された前回と同じように武装したエフェーボイが、秘儀の聖なる花ギンバイカ（μυρίνη）の花冠を着けて、巡礼者の行列をエスコートする任務につく。その行列参加者の発した勝利の叫び（iacche）の擬人化であるといわれる「イアッコス」（Iaccos）が、バッコスに似た若き神へと発展して女神たちの旅の男性随行員となる。行列の整列の場であるディピュロン門付近にはイアッコスの神殿（Iaccheion）があり、イアッカゴーゴス（Iacchagogos）とよばれる特別の神官がいた。イアッコスの木像はその神官とともに四輪馬車に乗せられ、エレウシス詣の行列の先頭に位置した。アテナイからエレウシスまでの距離は二二・四キロメートルあるが、神官職を除く大部分の巡礼者はそれを徒歩で横断した。[38] ミュスタイとミュスタゴーゴイが行列の核をなし、他に多くのアテナイ人が巡礼に加わった。彼らは祭用の服を着てギンバイカの花冠をつけ、手には羊毛の撚り糸を結びつけたギンバイカの枝をもっていた。それに加えて、彼らは数日分の自分の食料を吊した棒を担いだりした。行列は笛や竪琴キタラの演奏者団体や歌手たちの聖歌隊を点在させていたし、荷物を運ぶロバやラバは行列の最後部をなした。ヒエラ・ホドス（聖道）は多くの宗教的遺跡を通過していた。幾つかのそうした場所――例えば、デーメーテールから授かったイチジクの聖木で知られる英雄フュタロスの聖所――では祭式的仕来りとして停止したであろうし、かれらは休息や飲食物をとる機会があったかもしれない。アテナイから聖道を西へ進むと、スキーロンの地、英雄ラキオスの神苑、ゼフュロス（西風）の祭壇、英雄フュタロスの聖所、そしてケフィソス川を渡ったところにゼウス・メイリキオスの祭壇がある。さらに進んでアエガレオス山の峠まで上ると、その見晴らしのよい所にアポローン・ピューティオスの神域がある。そこから曲折の多い坂をエレウシス湾の方へ下れば、透明な山波と真っ

青な海の景観が開けて、やがて海に近い岩を用いたアプロディーテーの神殿に至る。[39] かれらはその先、レイトイ川とケフィソス川を越えてエレウシスに着いた。レイトイ川の橋を渡った地点に住むクロキダイ（Krokidai）は、各ミュスタイの右手と左足を黄色い毛糸でくくるという奇妙な特権をもっていた（その紐で秘儀加入者を保護するという魔術的目的が示唆されている）。また、ケフィソス川の橋を渡る際に、巡礼中の顕著な人々は橋の上に覆面をして坐っている人々から、侮辱的言葉を浴せかけられることに耐えなければならなかったという（それは伝統的なgephyrismos＝abuse from the bridgeの場所であった）。こうしてついに、行列は暗くなってからエレウシスに到着するのであり、巡礼は松明に照らされて完了する。[40]

秘儀祭の第六日と第七日（二〇日～二一日）は、エレウシスでの秘儀加入儀式「ミュステーリア」（μυστήρια）である。この加入儀式は「テレテー」（Τελετή）とも呼ばれる。[41] 二〇日の昼間は休息、断食、浄化、または供犠に当てられた。なかでも完全な浄化のために、また身体から悪を取り除くために本質的なものと考えられた断食は、ミュスタゴーゴイの指示によりすべてのミュスタイによって守られた。エレウシスでは、それはコレーが誘拐されたのちデーメーテールが行った断食を記念し、かつそれを模倣するものとして行われた。また、ミュスタイはデーメーテールの例に倣って葡萄酒を差し控えた。彼らは断食終了時に、キュケオーン（κυκεών）という大麦の粉と水とミントを混ぜた特殊な飲物を飲んだ。[42] この日、バシレウスとその補佐役とエピメレータイの監督の下に、デーメーテール、ペルセポネー、およびその他のエレウシスの神々のための主要な供犠が再び行われた。エウモルピュダイ氏族の権限において大麦と小麦から作られたペラノス（こね菓子）は、穀物の女神デーメーテールにふさわしい奉納物であった。[43] さて、夕方ミュスタイは持参した新しい衣装を着て、加入儀式に臨んだであろう（それは二夜に渡って催された）。エレウシスの周壁に囲まれた聖所の中でミュスタイはいかなる経験をしたのであろうか。外側の門プロピュライアで彼らは検査されその適格性が確認された。多分、エレウシスの神域に入る人々に対して、アデュトン（adyton. 神殿

の内陣）に進まないうちに式次第が告げられた。彼らの名前は神官の保管する木製のタブレットに記録され、また彼らのギンバイカの花冠は二柱の女神への献身の紋章であるリボン付きの花冠と取り替えられた。儀式が実際に始まると、ミュスタイは畏怖と困惑の状態を通過したはずであるが、しかしまた最終的には至福と歓喜の溢れる何らかの体験をした。そうした体験は何であったのか。ミュロナスによれば、その祭事は三つの異なる要素を含んでいた。――すなわち、ドローメナ（δρώμενα. 演じられたこと）、レゴーメナ（λεγόμενα. 語られたこと）、デイクニューメナ（δεικνύμενα. 明されたこと）である。[44]

ドローメナの一部分を成すものは神聖野外劇であって、デーメーテールの女性神官（priestess of Demeter）によってデーメーテールとペルセポネーの周知の物語が演じられ再現された。[45] 野外劇は音楽、歌謡、歩調を整えて歩く動作を伴ったが、ほとんど説明の言葉がなく、対話もないものであった。しかし、それは非常に印象的で、畏怖、悲しみ、絶望、そしてカタルシス（悲劇の目的における浄化のような）をもたらしうる歓喜を伝達することができた。それは夜の暗闇に包まれた神秘的な松明の明かりの中で演じられた。多分、ミュスタイは悲劇を見るたんなる観客と異なり、ドローメナにおいては一定の役割を演じた。つまり、ペルセポネーを捜して聖域内を移動したし、彼女の不在を悲しみまた彼女についての知らせに望みをいだいた。その物語はテレステリオン（Telesterion. 秘儀堂）の中と外で、またかつてデーメーテールの現前によって聖化された諸標識の周りで展開した。母神の苦悩を分有したミュスタイは、最終的に母神と娘神の再開に歓喜した。多分プルートニオン（Ploutonion. 冥王ハーデースの神殿）の扉が開いて冥界から現われたペルセポネーは、松明の明かりによる祝いのウェーヴの中をテレステリオンへと向かったのであり、ミュスタイも秘儀加入儀式を受けるためにその中に入った。[46] 次に、レゴーメナについては、語られたことについての証拠や情報が全く欠けている。それを口外したり公にしたりすることは堅く禁止されていたし、そうした儀式の記録も何ら残されていないからである。[47] しかし、レゴーメナは宣誓の言葉でも長い宗教的論説でもなく、短い典礼式文の

陳述や説明、そして多分祈りの言葉であっただろう。それらはドローメナに伴う短いコメントであったが、極めて重要なものであった。レゴーメナなしでは加入儀式は不完全であり、またヒエロファンテスの言葉を聞くことができないならば、ミュスタイはおそらく彼が見たものを完全に理解することはできなかった（ギリシア語を解さない者の秘儀加入が許されなかったのもこの理由による）。レゴーメナは多少とも短い祭儀的な、典礼式文の決まり文句以外の何物でもなかったであろう。[48] さらに、デイクニューメナについては、明された客体が何であるかは知られないままである。そうした客体の最も重要なものは「聖なる物」であった。「聖なる物」はテレステリオンの中央にあるアナクトロン（Anaktoron. 至聖所）――ヒエロファンテスしか入ることの許されない仕切られた場所――に保管されていた。加入儀式のクライマックスにおいて、ヒエロファンテスはアナクトロンの正面に立ち、放射される光の只中で「聖なる物」をミュスタイに示した。しかし、この「聖なる物」は一体何であったのか。[49] 不幸にも今日われわれはそれを知ることができないが、古代においてそれは重要な秘密であり、それを暴露することは厳しく罰せられた。[50] ともかく「聖なる物」の顕示は加入儀式の最重要部分であり、この祭事の頂点をなした。

なお、「ミュステーリア」には、「テレテー」とともに「エポプテイア」（epopteia）として知られる段階がある。それは最高位の秘儀加入儀式を指し、この儀式を受ける人々はエポプタイ（凝視者）と呼ばれた。おそらく幾つかの聖なる客体は、秘儀加入者のうちエポプタイに対してのみ示されたと思われる。[51]

秘儀祭の第八日（二二日）は、「プレーモコアイ」（Πλημοχόαι）である。この日はミュスタイのエレウシスでの最終日であり、主に死者のための灌奠と祭事に捧げられた。[52] ミュスタイは一対のプレーモコアイと呼ばれる特殊な容器――それはコマのような形で台座が付いていた――をとって液体（または水）で満たした。それから彼らは祭式的な決まり文句を唱えながら、一つを東の方へ、もう一つを西の方へ向けてひっくり返し地面に注いだ。[53] またこの日、大多数の人々は加入儀式のときに着ていた新しい衣装を女神に捧げた（聖域内に衣類保管室があった）が、少数の人々

はそれを家に持ち帰って、やがて生まれてくる新生児の産着に用いた。[54] ミュスタイは多分、エレウシス滞在の残り時間を祝祭に費やし、歌や踊りを楽しんで過ごした。

翌二三日には、エレウシスで聖なるブーレー（Boule Hiera）が開催された。[55] ミュスタイはそれぞれ自国へ、またはアテナイへ帰路についた。また続く二四日に、アテナイでエレウシニオンでのブーレーが開催され、バシレウスとその補佐役による秘儀祭の運営に関する報告がなされた。[56]

次に、プロエーロシア祭（Proerosia）は、ピュアノプシオーンの月の五日にアテナイへ出向したヒエロファンテスとケーリュクスによる予告（πρόρρησις）がなされ、[57] おそらく翌六日にエレウシスで催された。[58] この祭の名称は語源的にも耕作の準備（πρό, ἀρόω）を意味し、またそれは明らかにエレウシス中心の祭であった。[59] それは穀物の初穂奉納を特徴とするもので、耕作と種まきによる農業の季節が開始される少し前にデーメーテールの恩恵を祈願するために行われた。[60] この祭は喜劇作家によって言及されていないが、エウリピデスの悲劇作品『救いを求める女たち』には出ている。そのエレウシスでの冒頭場面で、アルゴスからの嘆願者に同情したアイトラ（テーセウスの母）は次のように祈っている。――「……たまたま私は館を出て、実り豊かな穀物の穂がこの地上にはじめて毛並みも鋭く生え出たと言われるこの聖域に参り、大地の豊作を祈ってお供えを捧げていたところでございますが、嘆願の枝の枷なき枷にこのとおり縛られて、二柱の女神コレーとデーメーテールの聖なる祭壇の御前に立ちすくんでおります。それと申しますのも生みの子を失ったこの老母たちを憐れと思ってのことでもありますが、神聖なかざしを崇めるゆえでもございます。[61]」

次に、オスコフォリア祭（Oschophoria）はピュアノプシオーンの月の六日に行われたと推定される。[62] その名称は「葡萄の房のついた枝（ὄσχος）を運ぶこと」を意味するから、本来は葡萄の収穫祭であると考えてよい。ただし、オスコフォリア祭は奇妙な儀式を伴うし、それがディオニューソスの祭かアテーナー・スキラスの祭か、それともテー

セウスの事跡を祝う祭かといったことについて複雑な性格をもっている。この祭ではアテナイからパレロンへ向う行列が見られる。それはアテナイのディオニューソスの聖所（おそらくリムナイの）を出発して、パレロンにあるアテーナー・スキラス（Skiras＝スキーロス勧請の）の神殿まで進んだ。葡萄の房のついた枝を運ぶオスコフォロイ（oschophoroi）が、行列の先頭に立った。彼らは生まれと富において卓越している人々の中から選ばれた二人の青年で、奇妙なことに女性の衣装で着飾っていた。それに「オスコフォリア讃歌」と呼ばれる特別の讃歌を歌う合唱隊が続いた（ただし、歌詞は何ら保存されていない）。幾人かの婦人がデイプノフォロイ（deipnophoroi. 夕食を運ぶ人々）として行列に参加しており、彼女らは行列のみならず、供犠の後の宴会にも出席した。その宴会は厳粛な威厳をもったものであったらしく、何らかの伝説が食事の間に語られることが慣例であった。[63]

オスコフォリア祭の特徴は、古くからテーセウス物語（クレタ島への出航と帰還）に結びつけて説明されてきた。[64] プルタークの「テーセウス伝」によれば、アテナイはアイゲウスが王であった時代に、クレタ王ミーノースとの間に九年目ごとに貢物として七人の少年と七人の少女を遣わすという協定を結んでいた。彼らは父親たちの籤引きによって決められ、クレタの迷宮ラビリンスの中で牛頭人身の怪物ミーノータウロスに殺されたか、奴隷になっていた。三度目の貢物の時節にテーセウスは自らこの「二倍の七人」の一行に加わって怪物を殺し、クレタの王女アリアドネーの手引きによって迷宮から脱出した。テーセウスとその一行はパレロン港から出発してパレロン港へ戻ったのであり、その船の舵取りはサラミスの人であった。パレロンにはサラミスの開拓者スキーロス（Σκίρος）の祠があったが、後にその傍らにこの時の舵取りの祠を建て舵取祭（Kybernesia）を催した。一行の帰還の日はオスコフォリアの日（あるいは葡萄の収穫の季節）に当たっていたとも、テーセウスがオスコフォリアの祭式を定めたともいわれる。こうして、奇妙な儀式はこの物語と結びつけられて説明され、葡萄の房のついた枝を持ち歩く女装した二人の若者は、少女に変身してクレタで活躍した二人の少年に倣い、デイプノフォロイは籤に当たった二倍の七人の母親たちに倣い、

行列に加わる伝令が花冠を被らずそれを杖に付けるのはテーセウスがアテナイへ送った使いに倣うとされ、また神酒を注ぐ儀式に連なる人々が「エレレウ　イゥーイゥー」と唱えるのは、テーセウスの帰還を頌えつつも王アイゲウスの投身死を悲しむからであるとされる。[65]

次に、ピュアノプシア祭（Pyanopsia）はピュアノプシオーンの月の七日に行われた。その名称は「豆類を煮ること」（πυανου ἑψεσις）を意味し、行列を伴う秋祭りである。それはアポローンの祭祀とされて、月にその名前を与えるところとなった。また、七日はアポローンの月例の祭日の日でもあった。プルタークによれば、テーセウスが「父を葬ってからアポローンに誓いを果たしたのが、ピュアネプシオーン上旬の七日目に当る。……豆を煮る慣例は、助かった人々が残っていた食糧を一緒に混ぜて同じ釜で煮て互いに分け合って食べたところから出たと言われる」。[66] アテナイの人々はこの日、豆類（πυανα＝pulse, beans）やその外の野菜のシチューを作りアポローンに供えるとともに、祭の宴会でこれを食べる慣習があった。エレウシスの祭暦を見ると、この日アポローン・ピュティオス（Pythios＝ピュートーに坐す）に、二〇ドラクマ相当の山羊が捧げられている。[67] アテナイでは近郊イリソス川の畔にあるピュテイオンかデルフィニオン[68]への行列が行われた。それには両親とも健在な少年（παις αμφιθαλης）が、「エイレシオーネー」（ειρεσιωνη）と呼ばれる枝を担いで参加した。それは豊穣のシンボルとして聖所の扉の上に飾られたのみならず、祭が終わってからしばらくの間、各家庭の戸口に立てられていた。[69] エイレシオーネーはオリーヴの木（または月桂樹）の枝に羊毛を巻き付け、それにあらゆる種類の初穂初実を懸けたもので、それを運ぶ少年たちの歌では「エイレシオーネーは無花果や、おいしい菓子や、壺に入った蜂蜜や、身体に塗るオリーヴ油や、酔って寝てしまう芳醇な葡萄酒を付けている」[70]と歌われている。

次に、テーセイア祭（Thesseia）はピュアノプシオーンの月の八日に行われた。これはテーセウスを祀る国家祭祀として前四七五年に制定されたものである。八日はポセイドーンの月例祭日であったが、テーセウスはポセイドーン

の子とされていたので、その日付はまた彼の儀式にふさわしかった。アテナイの将軍でミルティアデスの子キモーン（Kimon）は、アテナイ同盟の新艦隊を指揮してスキュロス島（Scyros）の海賊の根拠地を攻略した。伝説によればテーセウスはこの島で死んだ。キモーンはデルフォイの神託を攻略の正当化にもちいていたが、その神託に従ってテーセウスの遺骨を発見しアテナイに持ち帰った。それはアゴラ付近の囲い地（Μνῆμα. 聖墓所）のなかに安置され、そのとき以来テーセウスを祀る主要な祭として確立された。[71] テーセイア祭は行列、供犠、スポーツ競技会を伴ったし、国費で賄われた犠牲獣の肉の民衆への配分や、アタレー（ἀθάρη）と呼ばれるポリッジ（粥）と大麦のパンの提供があって大衆的なものであった。[72] テーセウスがかなり昔から崇拝されていたことは、すでにペイシストラトスの頃アゴラの東部にテーセイオンがあったとされることや、[73] 前六世紀末の陶画に彼の英雄談のエピソードが描かれていることからも知られる。しかし、以前はフュタリダイ（Phytalidai. アテナイより西方ラキアダイ区の一氏族）等の幾つかの貴族的家系が、テーセウスの祭祀を特権的に司っていたと思われる。[74] ペルシア戦争の勝利後、テーセウスは次第にアテナイの民主的英雄――夷狄からの防衛者、国制の最初の変革者、あるいは人民（デーモス）の保護者――として発展していくのである。

次に、ステーニア祭（Στήνια. Stenia）はピュアノプシオーンの月の九日に行われた。[75] これはテスモフォリア祭の二日前に営まれた女性だけの祭であるが、その儀式については何も記録されていず不明である。[76] ただし、ジーモンによれば、デーメーテールの召使イアムベー（Iambe）が、悲しみのあまり口をきかなかった女神を笑わせたことに因んで営まれたもので、夕方、女性だけが集り互いに嘲罵しあったという。[77]

翌一〇日は、ハリムスでのテスモフォリア祭（Thesmophoria in Halimus）である。この祭自体は地方的テスモフォリアにすぎなかった。しかし、それは前日のステーニア祭と、一一日～一三日まで三日間のテスモフォリア祭との間を埋めて五日連続の休日をアテナイの婦人たちに提供した。ハリムス（区）はパレロン港の南端コリアス岬にあ

り、アテナイからは一二～三キロメートルの距離である。当然、乗物で移動する必要があり、したがってアテナイの比較的裕福な婦人たちがハリムスへ出向いて、そこでの供儀と舞踊に参加したと考えられる。プルタークによれば、ソロンの頃すでにアテナイの指導的な婦人層はハリムスでデーメーテールのための祭祀を行っている。[78]

さて、テスモフォリア祭（Thesmophoria）はピュアノプシオーンの月の一一日～一三日にアテナイのプニュクスの丘近くの聖所テスモフォリオンで催された。テスモフォリア祭はアテナイのみでなくギリシア世界のほとんど全ての部分で観察され、それだけ古く原初的な起源にまで遡るものであったと思われる。この祭は男性を除外して婦人だけで営まれた豊穣の祭式であり、デーメーテール・テスモフォロス（Thesmophoros＝掟を授ける）とコレーのための秘儀が行われた。ところで、「テスモス」（θεσμός）は「掟」を意味するアルカイックな言葉であるが、ギリシア語の用法では動詞「運ぶ」（φέρω）――またそれから派生した「―フォリア」（―φορία）――と結びつかないとされる。そこで、「テスモス」とは物理的に運ばれる何らかの物質的客体をそう呼んだものであろうと考えられた。通説ではそれはスキラ祭の時、地下の「室」（メガロン）のなかに投ぜられた仔豚や練り粉で作られたヘビやファロスの朽ちた遺物であった。その洞穴から手桶で内容物を引き上げるアントレトリアイ（Antletriai. 掻い出す人）と呼ばれる婦人の一団があった。彼女らは手をたたいたり鳴り物を鳴らしてヘビを追い払いつつ遺物を回収した。この「テスモス」は恐らく祭壇の上に置かれて穀物の豊穣を約束する特別な力を持つものとされた。[79] カレンダー・フリーズでは、ピュアノプシオーンの月のエイレシオーネーを背負う少年の先に、頭上に大きな円形の籠（kiste）を乗せて運ぶ婦人が描かれている。おそらくこの婦人（kistaphoroi）はテスモフォリア祭を表わしている。[80]「テスモイ」は祭壇から下ろされた後、種麦と混ぜられてピュアノプシオーンの月の終わり頃からマイマクテーリオーンの月にかけて耕地に播かれたとされる。[81] ところで、テスモフォリア祭は厳密に婦人たちに限られた秘儀であったから、祭にふれている文献もその儀式内容を伝えていない。[82] また、アリストパネスはこの祭を男性観客を笑わせるための喜劇の場面に選

んではいるが、注意深く祭式への重大な言及を避けている。そこではコロスが舞唱において、デーメーテールとコレーのことである「女神たち」（πότνιαι）の降臨を求めて次のように歌う。――「おいでませ、み慈（めぐ）みふかくお優しい／女神さまがた、私どものこの神苑に。／いかにもここでは殿方衆が両神さまの／とおとい祭事をのぞき見するは許されませぬ、／篝（かがり）の火かげに不死の姿を現じたもうおり。／おいでませ、来降しませ、おねがいしまする、おお、／掟授けの、あやにとうとい両神（ふたがみ）さま。／いつぞやむかしも、祈りをきこして／おいでたならば、今もおいでて、このところなる／私どもへ来降しませとお祈りしまする。」[83]

祭の第一日（一一日）は「アノドス」（Anodos＝上り道）と呼ばれる。テスモフォリオンは何らかの壁または柵で囲まれた広い空き地であったに違いない。それは男性の侵入者に対して閉鎖されていたし、また参加した大勢の婦人たちを収容しうる広い地域が必要であった。一旦、祭が始まると彼女たちはそこで三日間野営するのであり、仮小屋または収容施設を並び立て互いの間に通路を設け、そうした小屋の中で二夜を一緒に過ごすのである。[84] 恐らく彼女たちはアテナイのある集合場所から行列を組織してテスモフォリオンへ上ってきた。その行列は寝具や料理道具や小屋を建てる素材を運ぶ荷馬車を含んでいたし、そうした行列や野営地の設計にはかなりの組織力と権威の使用を必要としたであろう。地方的テスモフォリア祭の場合に役員（Archousai）として活動するために毎年選ばれる二人の婦人への言及があるが、国家テスモフォリア祭においても同様の役員が選ばれて指揮をとっていたと思われる。[85] 祭の第二日（一二日）は「ネステイア」（Nesteia＝断食の日）である。この日は祭の中日であり、大勢の婦人が松明の煙の火影の中をテスモフォリオンに上ってきた。[86] そして、婦人たちの集まりや供犠を伴う何らかの祭式があったと考えられる。松明に照らされた夜中の儀式はデーメーテールの祭祀につきものであるし、その供犠は地下神との接触、あるいはさらわれたコレーの死の結婚のイメージを伴う。ただし、婦人たちによってひそかに遂行された供犠については何も知られていない（「カルキス人の追跡」Chalcidicon Diogma という意味不明の名称を挙げている場合があるけれ

ども[87]）。その日が断食の日と呼ばれたように、婦人たちは地面の上に柳の小枝や欲情抑制の効果をもつ草木を敷いたベッドで寝起きし、昼間も食事を控えて地面にじっと座ったままだった。伝説の中のデーメーテールがエレウシスの宮殿で椅子に座るのを拒んだように、祭に参加した婦人たちは悲嘆と苦悩の行為を模倣したのかもしれない。祭の第三日（一三日）は「カリゲネイア」（Kalligeneia＝良き子授け）である。断食がついに終わり、夕方には神々への供犠と肉を伴う宴会が催された。そのときデーメーテールに随行する女神で、祭式においてのみ存在するカリゲネイアの来降が祈願された。この女神は農業生産でも畜産でもなく、人間の出産――良き子授け――を象徴した[88]。デーメーテールは穀物収穫の女神であるけれども、また人間の出産をも司ったのである。アテナイの婦人たちは耕作の時期に先立って彼女たちだけの祭を催した。そして、断食の日の悲嘆と忍耐に続く、最終日の祭式では子供の授かりものを祝福し、子供たちと将来の家族のための恩恵を神に祈願したであろう。

次に、カルケイア祭（Chalkeia）はピュアノプシオーンの月の三〇日に行われた。この祭の名は鍛冶（Chalkeis）の語と同様に、銅（χαλκός）に由来する。それは青銅器時代にまで遡る工人の祭を示唆するが、やがて火と鍛冶の神ヘーパイストスの祭祀となった。古典期には、カルケイア祭はヘーパイストスとアテーナーの両神に結びついていた。ヘーパイストスはその信仰が広がっていた小アジア（北東エーゲ海地方）からアテナイに導入されたもので、ギリシア本土の他の地方ではほとんど崇拝されていなかった。しかし、アテナイではこの跛の神は原初的伝説においても、また技芸においてもアテーナーと密接な関係を保っていた。それゆえ、この両神はパルテノン・フリーズのオリュンポス十二神の構図では互いに隣り合って座っていたし、アゴラを見渡している丘の上に立つ神殿ヘーパイステイオン（Hephaisteion．前四五〇年以降の建立）の中では共に手工業の神として祀られていた[89]。パウサニアスはこう述べている。――「ケラメイコス区とストア・『バシレイオス』越にヘーパイストス神殿。ヘーパイストス神像のそばにアテーナー神像があるが、わたしはエリクトニオスにまつわる物語を知っていたため、これはべつに、ふしぎとは思わ

なかった。[90]」さて、カルケイア祭の特徴はそれほどはっきりしないとはいえ、明らかに手工業者の行列や供犠、また犠牲獣の肉での宴会が催された。供犠は主にアテーナー・エルガネー（Ergane＝工匠女神）のために捧げられていた。[91]この祭日はまた、アクロポリスの上にアテーナーの女性神官とアレーフォロイの二人の少女によって織機が据えられ、四年に一度の大パンアテーナイア祭のための「ペプロス」が織り始められる儀式の日であった。それから「ペプロス」は約九カ月かかって、エルガスティナイ（Ergastinai）と呼ばれる女性たちによって織り上げられていった。

次に、アパトゥリア祭（*Ἀπατούρια*. Apatouria）はピュアノプシオーンの月に行われ三日間祝われたが、日付は不明である。（マイカルソンは一九日～二一日、または二六日～二八日の三日間であろうと推定している。[92]）その第一日は「ドルピア」、第二日は「アナリューシス」、第三日は「クーレオティス」と呼ばれた。その翌日「エピブダ」も、しばしば（第四日として）祭に加えられた。さて、アパトゥリア祭はポリスによって公的祝祭として認められていたけれども、その儀式は中央の役人たちの掌中にはなく、生まれによる結合である諸共同体――フラトリア（Phratriai. 胞族、兄弟団）――に委ねられていた。理論的には、フラトリアの全ての男性メンバーは共通の男性の祖先からの子孫であり、アパトゥリア祭は本質的にそうしたフラトリアの祭であった。[93]そして、ピュアノプシオーンの月の中であるならば、それ自身のアパトゥリア祭をその月の適当な日に開催することは、各フラトリアの都合または伝統に任されていた。各フラトリアはゼウス・フラトリオス（Zeus Phratrios）とアテーナー・フラトリア（Athena Phratria）の祭壇を備えた聖域（*ἱερόν*）をもち、アパトゥリア祭の時にはそのメンバーは地元のみならずアッティカ各地からこの聖域に集った。[94]その祭の際に、父親は子供が三歳になる頃フラトリアに紹介し、その後、子供が成長して壮丁となる頃、再びフラトリアに紹介せねばならなかった。また、結婚した夫はアパトゥリア祭の時に妻との婚姻をフラトリアに披露したが、それらはいずれもフラトリアの祭壇に犠牲獣を捧げて行われた。[95]祭の初日「ドルピア」（Dorpia＝夕食会の意）においては、各地から集まってきたフラトリアのメンバーが集会をもち一緒に

食事をした。二日目「アナリューシス」(Anarrhysis) は供犠の日で、生贄の首を引き戻して喉を切る動作からそう名付けられたという。三日目「クーレオティス」(Koureotis=青年または断髪に由来) は、新しいメンバーがフラトリアに紹介される公式の機会であった。そして嫡出子の誕生、成人、結婚の報告は、犠牲獣の肉や葡萄酒を用いたお祝いの宴会となった。その翌日「エピブダ」(Epibda) は、報いの来る日、つまり二日酔いのために悪名高かった日である。[96]

注

(1) Mikalson, *The Sacred and Civil Calendar of the Athenian Year*, p. 47. この祭日の典拠はプルターク (彼によれば、アテナイ人はその日にアテーナーとポセイドーンの領有権争いが起こったとする。Plutarch, *Moralia*, 489 B, & 741 B) とプロクロス (Proclus, *In Platonis Timaeum Commentaria*, 53 D) である。しかし、ドイブナーはその日付を疑っている (Deubner, op. cit., p. 235, note 2) し、パークはニケーテーリア祭にふれていない。

(2) Robert Parker, *Athenian Religion: A History*, Clarendon Press Oxford, 1996, p. 70.

(3) Robin Francis Rhodes, *Architecture and Meaning on the Athenian Acropolis*, Cambridge University Press, 1995, p. 64. Hurwit, op. cit., pp. 211–212.

(4) IG I³ 35, lines 55–6, & 10–11. Rbert Garland, *Introducing New Gods*, Cornell University Press, 1992, pp. 102–103. cf. R. Parker, op. cit., pp. 125–127. なお、アテナイ人は前三〇四／三年にアテーナー・ニーケー、アガテー・テュケー、および救い主の両神 (ゼウスとアテーナー) への供犠を「出征する人々の加護のために」決議している。SEG XXX, 69, lines 15–17; R. Parker, op. cit., p. 262.

(5) Parke, op. cit., p. 53.

(6) Thucydides, II, 34. 久保訳 (上)、二二三頁。

(7) Parke, op. cit., p. 54.

(8) Mikalson, op. cit., p. 50. Simon, op. cit., p. 82.

(9) アルテミスは普通アテナイでは戦争の女神ではなかった。だから、その誓願はマラトンの戦いとアルテミスの伝統的祝日との間の、日付上の関連のゆえになされたと想定することは理に適っている。しかし、六日は実際の戦闘の日でなく、アテ

ナイでマラトンへ向けて出征するという決定がなされた日だったと考えられる。マラトンでの戦闘は一〇日以後に起った。なぜなら、アテナイの伝令ピリッピデスが九日に到着するや直ちに出兵の要請を受けたスパルタ軍は、自国のアポローンの祭であるカルネイア祭（Carneia）の満月が過ぎるまで出征できないと答えたからである。アテナイ軍はスパルタ軍の到着を待たずに、プラタイアの援軍とともに戦端を開いた。cf. Herodotus, VI, 105 ff. 邦訳、二九二頁以下。Parke, op. cit., p. 55.

(10) Herodotus, VI, 117. 邦訳、二九五頁。アテナイ軍はマラトンのヘーラクレースの聖域に布陣した。アテナイ軍だけで交戦することの可否について十人の将軍の意見は二つに分かれていたが、ミルティアデスは軍事長官のカリマコスを味方にひきいれて交戦の決定に導いた。軍事長官カリマコスは慣例により名誉ある右翼陣を指揮し、この時の激戦で目覚しい働きをしたのち戦死した。

(11) Xenophon, *Anabasis*, III, 2, 12; Loeb, p. 442. Parke, op. cit., p. 55.

(12) Parke, ibid. なお、アグライのアルテミス神殿には、アルテミスとともに（アレースの姿の）エニュアリュオスも祀られていた。

(13) Demosthenes, 3, 31. Parke, op. cit., p. 53.

(14) Pausanias, IX, 17, 2. 飯尾訳、六一五頁。Parke, ibid.

(15) エウリピデス『イオン』一五六六。『ギリシア悲劇Ⅲ』六二八頁。

(16) Plutarch, Theseus, 27. 邦訳(一)、四四—四五頁。

(17) ただし、マイカルソンのカレンダーにはこの祭は見えない。Mikalson, op. cit., pp. 51-52.

(18) Herodotus, VI, 105. 邦訳、二九二頁。Parke, op. cit., pp. 172-173.

(19) Plutarch, *Moralia*, 349 F. Mikalson, op. cit., p. 53. *Athenaion Politeia*, XXXVII-XXXVIII. ここに祝われた事件は、前四〇四年の三十人僭主制により追放されたトラシュブロス（Thrasybulus）ら亡命していた「民主派」がテーベから挙兵して同年冬アッティカ北境の要塞ピュレー（Phyle. パルネス山西南部）を占領し、そこからさらに前四〇三年にペイライエウスへ帰還して三十人僭主制との戦いに勝ったことを指す。それはペロポネソス戦争の敗戦国アテナイに再び民主制を復活させた出来事であった。

(20) Deubner, op. cit., p. 39. R. Parker, op. cit., pp. 228-229. cf. Louis Gernet et André Boulanger, *Le génie grec dans la religion*, Albin Michel, 1970, p. 204, et p. 261: "des personnifications comme celle de *Démocratie* à Athènes n'ont guère de vie, ni d'importance; et, d'autre part, des images concrètes d'unité religieuse, comme

celle du foyer commun, sont justement trop concrètes, ...”

(21) Pausanias, I, 3, 2-4. 邦訳、八—九頁。R. Parker, op. cit., p. 228. cf. ibid., p. 239, & note 76. —“the statue in front of the stoa of Zeus Eleutherios was spoken of indifferently as representing either Zeus Eleutherios or Zeus Soter.” “public inscriptions of the fourth cent. vary between ‘Soter’ and ‘Eleutherios’ for the statue.” ゼウス・エレウテリオスの祭祀は、ペルシア戦争（前五〇〇—四七九年）直後に、アテナイの自由を守り給うた神として始められたが、この神像自体はペロポネソス戦争（前四三一—四〇四年）開始の頃ようやく建立された。また左右に翼部をもつ列柱館「ゼウスのストア」は、その神像にやや遅れて建立されたもので（c. 430-420）、ソクラテスの対話の舞台にもなっている。

(22) Antiphon, VI, 45; Loeb, *Minor Attic Orators I*, p. 280. R. Parker, ibid.

(23) IG II² 1496, lines 131-132; *Syllogē*³ 1029, lines 67-68. R. Parker, op. cit., p. 228 & notes 40-41. 一頭の牡牛の皮を六～七ドラクマであるとして計算すれば、犠牲獣の数は六〇～七〇頭ほどである。

(24) IG II² 5029a. R. Parker, op, cit., p. 229.

(25) Mikalson, op. cit., p. 54. George E. Mylonas, *Eleusis and The Eleusinian Mysteries*, Princeton University Press, 1961, p. 246.

(26) ミュロナスは、それが暗黒時代を通してエレシウスに残存していた、ミュケーナイ時代の宮殿の神殿に付属する物であったと憶測している。Mylonas, op. cit., p. 84, p. 274. Parke, op. cit., p. 59.

(27) IG I³ 81. Pausanias, I, 38, 1. 「『レイトイ川』は、流れだけは川の形を見せているが、水質で見るかぎり海である。あるいはこの川が、エウリポス海峡沿いのカルキスから発して地中を流れ、さらに深い海中まで入っている、という話も、信じる人は信じるかもしれない。この川はコレーとデーメーテールの神川だ、といい、この川の魚を獲ることは、祭司たちだけに許されていた。地元でたずねて見ると、古くはこの川がエレウシス領とそれ以外のアテナイ人たちの土地との境界だった。」飯尾訳、七七頁。

(28) Parke, op. cit., pp. 60-61.

(29) IG II² 1672, line 207; Mylonas, op. cit., p. 237; Parke, op. cit., p. 61. ところで、エレウシスの祭儀にかんする碑文史料の中でも特に古いものの一つ（Decretum de Eleusiniis, c. a. 460, SEG X, 6; IG I³ 6）に次のようにある。——「[受け取った] オボロスの総額は、一六〇〇ドラクマを除き二柱の女神のものたるべきこと。そしてこの一六〇〇ドラクマからデメテルの女神官は年度期限内に支出された額を、支出された額通りに支払うべきこと」（C, lines 97-103）。

このように、ミュスタイの払う諸種の手数料は一旦デーメーテールの女性神官のもとに集められるが、一六〇〇ドラクマを残して他は二柱の女神の聖なる貨幣となって、アテナイ人の、すなわち国家の管轄下に入る（C, lines 115-121）。桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、一九九六年、五六―五八頁参照（引用碑文の訳も桜井による）。

(30) Mylonas, op. cit., p. 244.

(31) Mylonas, op. cit., p. 237. R. Parke, op. cit., pp. 61-62 (a fine of 100 drachmas). 桜井、前掲、五七頁（一〇〇〇ドラクマをもって処罰）。SEG X, 6, C, lines 112-113; IG I³ 6, C, lines 29-30.

(32) 豚はデーメーテールに奉納された慣習的犠牲獣であり、多分、生産力の自然的象徴であった。この場合、犠牲の仔豚は、償いのために用いられた。Parke, op. cit., p. 62. 豚は犠牲に捧げられて聖なるラリオン平野の浄化や、エレウシスの聖域自体と女性神官の家の浄化のために用いられていた。そして、豚の血は人間に巣くう不純な霊を吸収する力をもった、浄化のための潜在的な能因であると考えられた。Mylonas, op. cit., p. 249 & note 126.

(33) Aristophanes, *Peace*, 374-375; Frogs, 337-338. 「それなら子豚を買うために三ドラクマ貸しな。死ぬ前に秘教に入会しなくちゃ」（『ギリシア喜劇Ⅰ』高津訳、四五七頁）。「おお、いとも尊き御主、デメテルの御娘、なんてうまそうな豚肉の香だ。　静かにしろ、腸くらいくれるかもしれん」（同Ⅱ、三三一頁）。

(34) Deubner, op. cit., p. 72. cf. Mikalson, op. cit., p. 56 & p. 65.

(35) Mylonas, op. cit., pp. 250-251.

(36) Mylonas, op. cit., p. 251.

(37) Mylonas, ibid. Parke, op. cit., pp. 64-65.

(38) 前四世紀には金持ちは四輪馬車に乗って巡礼に参加するのが通例となったが、リュクルゴスの法令はそれを禁止し、違反者に六千ドラクマの罰金を課した。Plutarch, *Moralia*, 842 A [Vitae X Oratorum, Lykourgos]; Loeb, p. 400. Mylonas, op. cit., p. 253.

(39) Pausanias, I, 36, 3-38, 5. Mylonas, op. cit., pp. 252-255.

(40) Parke, op. cit., p. 66. 年長者の巡礼は露営するか宿泊するかして休息したであろうが、より情熱的な若者はエレウシスでの徹夜の祝賀を好んだであろう。また、祭のこの時点で、デーメーテールに対してケルノイ（kernoi）の奉納がなされたかもしれない。ケルノイは沢山の小さなカップが付着した円形の陶器製の皿で、カップのなかに様々な種類の穀物や豆類を入れて高く捧げて運び、女神に感謝するものであった。Mylonas, op. cit., p. 257. Parke, op. cit., p. 67.

(41) 「テレテー」という言葉はエレウシスの秘儀のみならず、一般にオルフェウス教団その他の秘儀への入信者をも意味する。

「ミュエシス」(myesis) の語も使われる (μύω=to initiate into the mysteries)。

(42) 「さてメタネイラが杯に甘い葡萄酒を満たして女神にすすめたが、女神はそれを受けなかった。紅に輝く葡萄酒を飲むのは、許されぬことと言い、大麦の粉と水にやわらかな薄荷を混ぜた飲物をくれるようにと請うた。メタネイラは言われたとおりの飲物を作って、女神にさしあげた」(デーメーテール讃歌第二番、二〇八行以下)。『ホメーロスの諸神賛歌』沓掛良彦訳、平凡社、一九九〇年、一八頁。

(43) Mylonas, op. cit., pp. 260-261. Parke, op. cit., p. 69. *Syllogē*³ 83, line 36; & 200, line 17.

(44) Mylonas, op. cit., p. 261. Parke, op. cit., p. 70.

(45) Mylonas, op. cit., p. 231. デーメーテールの女性神官はエウモルピダイ氏族またはフィレイダイ氏族に属し、エレウシスの「聖なる家」(ἱερὰ οἰκία) に住み終身であり、エレウシスの当該年度のエポニュモス (eponymos) となった。

(46) Mylonas, op. cit., pp. 262-263. 「デーメーテールとコレーは神秘的ドラマの主題となっていた。そしてエレウシスは娘の誘拐と母の悲嘆に暮れた放浪 [の儀式] を松明を用いて挙行している」(Clement of Alexandria, *Protreptikos*, II, 12, Loeb, p. 30)。「デーメーテールの秘儀祭では、松明を燃やして一晩中彼らはペルセポネーを捜す。そして彼女が見つかると、祭式全体が感謝の祈りをもって、かつ松明を捨てて終わる」(Lactantius, *Divine Institutes*, epitome, 23)。「ヒエロファンテスはコレーが名ざしで呼び出されるとき、いわゆるゴングを鳴らす習慣であった」(Apollodoros, Fragment, 36)。

(47) 「その秘儀は恐れ畏むべきもので、これを侵すことも、それについて問うことも漏らすことも許されない。神々に対する大いなる虔みゆえに、声に出すこともできないのである。幸いなるかな、地上にある人間の身にしてこれを見し者は。密儀を明かされず、祭儀に与ることなき者は、死して後、暗く湿った闇の世界で、これと同じ運命を享けることはかなわぬ」(デーメーテール讃歌第二番、四七七—四八二行)。邦訳、三四頁。

(48) Mylonas, op. cit., pp. 272-273.

(49) Mylonas, op. cit., pp. 273-274. ミュロナスによれば、それは世代から世代へと伝えられたミュケーナイ時代からの小さな聖遺物 (small relics) であったかもしれない。そうした聖遺物は奇妙なものであったし歴史時代のギリシア人に畏敬の念を起させるようなものであったに違いない。その時代 [古さ] やその外見の珍しさは、それが発見された神殿の中で、女神自身がそこに滞在中に使用したものであるという印象を与えたのであろう。

(50) 「いかにしてポリスは神々に関係する事柄では、ひとが秘儀に関して落ち度があるように思われる場合に最も激怒し、また他の事柄については、ひとが民主制を破壊しようとする場合に最も激怒するかを諸君は知っている」(Isocrates, 16 [De

Bigis], 6)。エレウシスの秘儀を暴露した嫌疑で告発された有名な事例として、悲劇作家アイスキュロス（Aeschylus, 525/4-456/5 B. C.）、弁論家アンドキデス（Andocides, c. 440-390 B. C.）の事件がある。cf. Mylonas, op. cit., pp. 224-229.

(51) Mylonas, op. cit., pp. 274-278. cf. Parke, op. cit., p. 71.—「かれら［エポプタイ］は他の加入者がまだ見ていないものを見ることを許可されたか、あるいは『聖なる物』を間近に見ることを許可されたかのいずれかである、とひとは推定してよい。」

(52) Mylonas, op. cit., p. 279.

(53) Parke, op. cit., p. 71. パークによれば、プレーモコアイの儀式の意味は不明であるが、それ自体としては雨を促進する魔術的祭事と考えられるという。

(54) この慣行の背後にある観念は、衣装もそれを着ている者と同様に、儀式から何らかの神聖さを獲得したということであった。それは世俗的な目的のために用いることはできず、聖域内に使われずにおかれるべきであった。あるいは聖化された衣装の布は、誕生直後の危険な時期に子供を保護することができると信じられた。Parke, op. cit., p. 72.

(55) Mikalson, op. cit., p. 60.

(56) Mylonas, op. cit., p. 280. Mikalson, op. cit., pp. 60-61.

(57) IG II² 1363; SEG XXIII, 80, fr. (a), col. I, lines 3-7.

(58) Dow and Healey, "A Sacred Calendar of Eleusis," *Harvard Theological Studies*, 21, 1965, pp. 15-16. Mikalson, op. cit., p. 68.

(59) Parke, op. cit., pp. 73-74. パークによれば、プロエーロシア祭はエレウシスを中心とするアテナイの国家祭祀であり一つの重要な公的行事であったけれども、民衆的な祭と呼ばれるようなものではなかった。しかし、マイカルソンによれば、プロエーロシア祭——ラリオン平野の祭式的耕作——はアテナイの国家祭祀ではなく、多分エレウシスの区だけの祭祀であった（Mikalson, ibid.）。また、ホワイトヘッドによれば、この祭が国家祭祀であるか否かは論争のあるところであるが、いずれにしろ祭式的耕作は地方毎に催されており、トリコス区ではボエードロミオーンの月に、ペイライエウス区やパイアニア区ではピュアノプシオーンの月のテスモフォリア祭の後に、ミリヌス区ではポセイデオーンの月に行われている（Whitehead, *The Demes of Attica*, 1986, pp. 196-197）。

(60) 前四二〇年頃に復活された制度では、アッティカの農民は大麦収穫の一〇〇分の六および小麦収穫の一〇〇分の一二を地方行政官（デーマルコス）を通して、エレウシスへ初穂奉納した。また、他のギリシア諸ポリスへも初穂奉納を勧める招待

状が送られたとされる。Parke, op. cit., p. 73.

(61) Euripides, *Suppliants*, 7 ff.; Loeb, III, pp. 498–500. 『ギリシア悲劇Ⅲ』中川恒夫訳、四〇八頁。

(62) W. S. Ferguson, "The Salaminioi of Heptaphylai and Sounion," *Hesperia*, VII, 1938, pp. 27–28. cf. Mikalson, op. cit., pp. 68–69. なお、サラミニオイ・ゲノスの碑文に次のようにある。――「ピュアノプシオーンの月、六日、テーセウスに四〇ドラクマ相当の猪［を捧げる］。付随経費三ドラクマ」(Ferguson, ibid., p. 5, lines 94–95)。

(63) Cf. Parke, op. cit., pp. 77–79.

(64) Parke, op. cit., p. 79. ―「こうした複雑な神話学的説明は、そうした原因論的伝説によって、祭式における異常性を説明しようとするギリシア人の愛好の高度に典型的なものである。テーセウス伝説の背後に横たわっているある種の歴史的事実を想定すべきであるとしても、これらの特定のエピソードは、たんに先行存在的な宗教的慣行に適合すべく発明されたのである。それらの真の起源が何であったかは、ほとんど憶測されえない。」

(65) Plutarch, Theseus, 15–23. 邦訳(1)、三〇―四〇頁参照。

(66) Plutarch, Theseus, 22. 河野訳、三八頁。

(67) IG II² 1363; SEG XXIII, 80, fr. (a), col. I, line 9.

(68) ともにアテナイ南西の郊外にあるアポローンの神殿であるが、ピュティオンの方はアポローン像と祭壇のみで神殿は立たなかったと思われる (Thucydides, VI, 54; Pausanias, I, 19, 1)。また、デルフィニオン神殿には、正当な理由を有すると申立てる者のための殺人事件を扱うデルフィニオン法廷が併設されていた (*Athenaion Politeia*, LVII, 3; Pausanias, I, 28, 10)。なお、アテナイ市内にはアゴラの西側にアポローン・パトローイオス (Patroios＝父祖伝来の神) の神殿があった。

(69) Simon, op. cit., p. 76. cf. Aristophanes, *Knights*, 729; Loeb, I, p. 192.

(70) Plutarch, Theseus, 22. Parke, ibid. パークによれば、エイレシオーネーは一団の少年たちによって家の戸口に持ち運ばれ、おそらく少年たちに対する何らかの贈物と交換に、祝福をもたらすものとして各家庭に残された。それには練り粉で作られた竪琴キタラや杯や葡萄の枝の模型や、様々な種類の実際の果物が吊されていた。それはクリスマス・ツリーと同じくらい意匠を凝らした一本の装飾であった。

(71) Plutarch, Theseus, 36. Pausanias, I, 17, 2–6. Parke, op. cit., p. 81. R. Parker, op. cit., pp. 168–169. Garland, op. cit., pp. 82–98.

(72) Parke, ibid. IG II² 956 & 1496. Aristophanes, *The Plutus*, 627; Loeb, III, p. 422. また、前一六〇年頃からの

テーセイト人戦捷会を祝祭コーロスとつなぐ。cf. *Sylloge*³ 667; Parke, op. cit., p. 82.

(73) *Athenaion Politeia*, XV, 4; Loeb, p. 47. cf. Rhodes, *Commentary*, p. 211.

(74) Plutarch, Theseus, 12 & 23. Parke, op. cit., pp. 81–82. R. Parker, op. cit., pp. 169–170. Garland, op. cit., pp. 89–94.

(75) Mikalson, op. cit., p. 71. Parke, op. cit., p. 88. Deubner, op. cit., p. 52–53.

(76) Aristophanes, *The Thesmophoriazusae*, 834; Loeb, III, p. 204. cf. Jon D. Mikalson, *Religion in Hellenistic Athens*, University of California Press, 1998, pp. 113–115.

(77) Simon, op. cit., pp. 19–20. また、シーモンの仮説によれば、婦人たちはまず市内の「室」に移されたのは四月月初のスキラ祭の時であり、テスモフォリア直前のハロエーイア祭の時である。

(78) Plutarch, Solon, 8. 邦訳(1)、一五頁。cf. Robin Osborne, *Demos: The Discovery of Classical Attika*, Cambridge University Press, 1985, p. 170. —"The Thesmophoria did not start in Athens at all; it started in a sanctuary on the west coast of Attika, at Halimous, from which the women processed to the city: the women are both pushed to the margins and to the city. This point is further confirmed by the problematic recognition of the day at Halimous as part of the festival: only by both counting and not counting this day can the third day and the middle day of the festival be equated (Ar. *Thesm.* and schol.)."

(79) Parke, op. cit., pp. 82–84. cf. Walter Burkert, *Greek Religion*, tr. by John Raffan, Harvard University Press, 1985, pp. 242–246.

(80) Simon, op. cit., p. 18. cf. Burkert, op. cit., p. 243, & p. 443, n. 25: "What is laid down may be called *thesmos* in Greek; these remains are carried by the women from the pits to the altars, as are the new gifts in return to the pits. On the Calendar Frieze the Thesmophoria are represented by a woman who carries a closed basket on her head. It is clearly in these terms that the name of the festival is to be understood, ..." "as an illustration of this meaning, there appeared in an inscription from Kos (*LSCG* 154 B 17) the words *thesmos e osteon:* 'sacrificial remains, or a bone'."

(81) Simon, op. cit., p. 21.

(82) 例えば、クロニーエスはハロエーイア祭をヒュブリーと起源と考えて次のように述べている。—「同様にギリシアではテスモポリアと称しているテスモフォルの人信者達によって、不敬とされたらば程度のいたずらを犯して、それは士は触れないことにした。」

の密儀をエジプトから外国に伝え、ペラスゴイの女たちに授けたのは、ダナオスの娘たちであった。」Herodotus, II, 171. 松平訳、一二二頁。

(83) Aristophanes, *The Thesmophoriazusae*, 1148-1159; Loeb, III, pp. 232-235. 呉茂一訳、二九六頁。コロスは先にオリュンポス神の神々、アルテミス、ヘーラー、ヘルメース、パーン、ニンフ、ディオニューソスへの讃歌を歌っている（九六九―一〇〇〇行）。またこの舞唱の前半では、パラス・アテーナー（Παλλάς）の降臨を願って次のように歌っている（一一三六―一一四七行）。――「歌舞をめでさせたもうパラスさまを／これなる舞いに招きまつるは定まるならい、／まだ生娘の姫神さまを。／われらが市（くに）を護らす御神、／また隠れなき力をもたせば、御神のみぞ／鍵の守（も）り手と呼ばれたもう。／来降しませ、おお、暴（あら）い僧主を／もとよりながら憎（おぞ）みたもう神。／君を呼ばうは、げにも女の／市民のつどい、来ませやここに／祭をめでる平和とともに。」ibid., p. 232. 同訳、二九五頁。

(84) 『女だけの祭』の中で、エウリピデスに頼まれ女装して侵入したムネシロコスは次のように尋ねられている。――「でたらめをあんたは言っているらしいね。前にももうここへ上ってきたことがあるの。――ええ、もちろん毎年来ていますわ。／そいで誰があんたの小屋仲間だったね。――あの女でしたわ、困ったな。」Aristophanes, 622-624; Loeb, III, p. 184. 邦訳、二六四頁。

(85) Isaeus, VIII, 19; Loeb, pp. 298-300. Parke, op. cit., pp. 85-86. 桜井万里子、前掲、一六六―一六九頁。

(86) Aristophanes, *The Thesmophoriazusae*, 80, & 280; Loeb, III, p. 138, & p. 156.

(87) Hesychius s. v., & Suda s. v. *δίωγμα*, *FGrHist*, 396 F 21. Parke, op. cit., p. 87. cf. Burkert, op. cit., p. 243.

(88) Parke, op. cit., pp. 87-88. cf. Burkert, op. cit., p. 244.

(89) Parke, op. cit., p. 92.

(90) Pausanias, I, 14, 6. 飯尾訳、二九頁。

(91) アテーナー・エルガネーのために穀物の入った籠（*λίκνον*）を運ぶ手工業者の行列（Sophocles, F 844; *Tragicorum Graecorum Fragmenta* 4, 1977）や、カルケイア祭でのアテーナー・アルケーゲティス（Archegetis＝創建加護の）のための供犠費用に関する前二七七／六年の評議会決議（IG II² 674）が知られている。Simon, op. cit., pp. 38-39. Parke, op. cit., p. 93.

(92) Mikalson, *Calendar*, p. 79.

(93) Cf. Herodotus, I, 147. 松平訳、五一頁。――「しかし実をいえば、アテナイにその起源をもち、アパトリアの祭を祝

うものはみなイオニア人なのである。エペソスとコロポンの住民以外は、全部のイオニア人がこの祭を祝う。」

(94) Parke, op. cit., pp. 88–90. S. C. Todd, *The Shape of Athenian Law*, Clarendon Press Oxford, 1993, pp. 179–180. なお、フラトリアは各人の市民権への接近をコントロールしていたし、役人の資格審査においてもその有資格性の証拠となるものであったとする解釈がある (Burkert, op. cit., p. 255–256)。cf. *Athenaion Politeia*, LV, 3; Loeb, p. 150. Rhodes, *Commentary*, p. 618.

(95) IG II² 1237; *Sylloge*³ 921 (Decrees of the Demotionidai, Deceleia). Parke, op. cit., p. 89. Burkert, op. cit., p. 255: "The new entrant is led to the altars, and a sacrifice is due in each case, *meion*, *koureion*, *gamelion*, for minor, lad, and marriage. All the Ionians have a three-day festival *Apatouria* once a year, when the *phrateres* meet for a sacrificial banquet provided for from the entrance fees. Among the northwest Greeks, at least in Delphi, the *Apellai* have the same function, with the three corresponding sacrifices for child, youth and marriage, *paideia*, *appellaia*, *gamela*."

(96) 子供が青年になったしるしに前髪を切り、それを神に奉納して生贄を捧げることは叙事詩時代からの伝統であった。アパトゥリア祭の祝賀会や乾杯は、葡萄酒の神を賛えて酒を注ぐ慣行をうみ、そこから「欺き」(ἀπάτη) の顕現であるディオニューソス・メライナイギス (Melainaigis＝黒山羊の皮衣の) の神話が生まれたという。Parke, op. cit., pp. 89–92. また、アパトゥリア祭のもう一つの光景は、プラトンによれば次のようである。――「その日はちょうど、アパトゥリア祭のクレオティスに当たっていた。そこでこの祭りの恒例の行事が、例年通りその時も子供たちのために行なわれた。つまり、父親たちが賞品を出して、われわれに詩の吟唱をさせたのだ。さてそこで、沢山の詩人の詩が吟唱されたが、しかしあの当時ではソロンの詩が新しかったから、われわれ子供でこれを歌う者が多かった。」Plato, *Timaeus*, 21 B. プラトン全集12、種山恭子訳、一四頁。

五　アテナイの冬の祝祭

マイマクテーリオーンの月の祝祭。――日付不明、マイマクテーリア祭。日付不明、ポンパイア祭。
ポセイデオーンの月の祝祭。――八日、ポセイデイア祭。二六日、ハローア祭。日付不明、田舎ディオニュシア祭。
ガメーリオーンの月の祝祭。――一二日～一九日、レーナイア祭。二七日、ガメーリア祭（テオガミア祭またはヒエロス・ガモス祭）。

マイマクテーリア祭（Maimakteria）はマイマクテーリオーンの月に行われたが、日付は不明である。この祭名またそれに由来する月名は、ゼウスの形容辞「荒れ狂う、嵐の」に由来し、大空の神、天候の神としてのゼウスに対する祭祀があったことを示している。冬の悪天候の季節に、風の暴力を支配して人々に親切であるようにという祈りが、神にたいして向けられた。この祈願は恐らく嵐による建物の損害がはるかに重大であった原初的時代に属していた。古典期には、大部分のアテナイ人にとってこの祭祀の意義は失われてしまった。[97]

また、ポンパイア祭（Pompaia）もマイマクテーリオーンの月に行われたが、日付は不明である。[98] この祭の名称は「行列」（Πομπή）に由来し、ゼウス・メイリキオス（Meilichios＝寛恕の）の祭祀である。（メイリキオスに対するもう一つの祭りとして、アンテステーリオーンの月のデイアシア祭がある。）ポンパイア祭の中心的特徴は、様々な清めの祭事に用いられる「ゼウスの羊皮」（Διὸς κώδιον）や悪を寄せつけない潜在力をもつ「カドゥケウス」（caduceus．蛇の巻き付いた魔法の杖）が行列で持ち運ばれたことである。多分、一頭の選ばれた雄羊がゼウス・メイリキオスに捧げられ、その取り除かれた毛皮が魔術的目的のために保存された。この「ゼウスの羊皮」は、何らかの仕方で穢れ人のもつ罪の伝染性を吸収し保持することができると見なされた。ポンパイア祭の行列は、このような

厄除けの象徴を伴って市の道筋を巡回したと想定される。[98]

次に、ポセイデイア祭（Poseidea）はおそらくポセイデオーンの月の八日に行われた。月名の由来となったポセイデイア祭が、この神の月例祭日の日（八日）に行われたと考えることは自然であるが、奇妙にもその証拠は若干の地方的供犠暦や私的団体の供犠暦に表われるだけである。[99] ヘロドトスは、アテナイ人がスニオン岬で四年目毎に祝う祭（おそらくポセイドーンの祭）があったことを伝えているけれども、それが航海に適さない真冬のこの時期のことであったかどうか疑問視されている。[100] 一般的論点としては、ポセイデオーンの月は、アッティカ暦がアポローン崇拝の影響下に整えられたとき、ゼウスやヘーラーの祭に因む月とともに冬の時期を割当てられたのであろう。もしポセイデイア祭が本来冬の祭りであったとすれば、考えられることは次の二つのいずれかである。――海の神を崇拝するための真冬の選択は、彼がその最も恐るべき力を示す時に彼に奉納するというあるパラドックスを示す。それとも、この祭の起源はポセイドーンがより広範な領域を支配する神（大地の潅漑神）であった時にまで遡る。[101]

次に、ハローア祭（Haloa）はポセイデオーンの月の二六日に行われた。この祭の名称は明らかに脱穀場（ἅλως）――ギリシアの村に依然、見られるような丸石でおおわれた円形の場所――と関連している。[102] ハローア祭はエレウシスで催された婦人だけの祭事であり、デーメーテールを崇拝するものであった。それにやがてディオニューソス崇拝も加えられた。この祭は本来は一つの豊穣の祭と考えられ、その目的は種子からの穀物の生長を促進することであった。その祭式のある部分を描いたと思われる赤像式壺絵がある。――そこでは一人の婦人が前傾姿勢で左手に持った箱から何かを地面に蒔いているが、彼女の前の地面には四本のファロスが立ち、それらの周りに芽をふいた植物が描かれている。[103] このように、おそらく麦の生長のためのファロスの祭事として始まった祭はハロース（円形の場所）での舞踊の奉納をともなったであろう。そして、それは秘儀祭で禁じられたザクロ、リンゴ、卵、鶏、それにある種の魚を除く、あらゆる種類の食物が用意された婦人たちの豊かな宴会、あるいは夜を徹してのオルギアとして終わった

であろう。前四世紀以降のハローア祭はその宴会の雰囲気から、穀物の豊穣とは本来、無関係な芸妓（hetairai）の祭になったといわれる。[105]

さて、田舎ディオニュシア祭（Rural Dionysia）はポセイデオーンの月に行われたが、日付は不明である。それは各デーモス（区）の選択にしたがって祝われたからである。比較的大きなデーモスでは演劇の競演が催された。しかし、ペイライエウスのディオニュシア祭は他を抜きんでていたし、少なくとも四日間続いた国家祭祀であった。[106] それを組織する責任を負うデーマルコス（区長）は他のデーモスのように地元で選出されたのではなく、国家の役人のように中央で、名簿に基づく抽籤によって選出された。[107] そこでは伝統的な行列とともに、洗練された悲劇や喜劇の競演が催された。外国からの使節もペイライエウスのディオニュシア劇場に招待されて観劇したとされる。[108] なお、アリストパネスの作品『アカルナイの人々』に、田舎ディオニュシア祭の小さな行列を描いた場面がある。アリストパネスは観客にペロポネソス戦争以前の平和な日々に対する郷愁を呼び起こそうとして、一つの和約（σπονδαί）を結んで身を引く主人公ディカイオポリスに田舎ディオニュシア祭を祝わせたのである。その行列のパロディは、カネーフォロス（聖籠捧持）となる彼の娘、ファロスを真直ぐに立てて運ぶ二人の奴隷、陽根歌を歌いながらついて行くディカイオポリス自身からなり、それに観客となる彼の妻がいる。喜劇につきもののみだらなジョークを混入させたとはいえ、その祭式の描き方は基本的に現実主義的であった。[109]

また、レーナイア祭（Lenaia）は多分ガメーリオーンの月の一二日～一九日に行われた。[110] アリストパネスの喜劇の「レーナイア祭での競演」について、ヘシュキオス（Hesychius. 五世紀頃のアレクサンドリアの辞典編集者）は次のように説明していた。――レーナイオン（Lenaion）はアテナイ市内の広い囲い地をもった場所で、そこには［ディオニューソス］劇場が建設される前、レーナイア祭の演劇競技が催されたディオニューソス・レーナイオスの聖所があった。[111] レーナイオンはアゴラの西側の「ストア・バシレイオス」付近に位置していたと推定される。[112] レーナイア祭

は田舎ディオニュシア祭に対応するアテナイの原初的なディオニュシア祭であって、古典期には春の演劇祭としての都市ディオニュシア祭が、この祭りから多くの威信を手に入れた。しかし、この祭は依然として行列と数日間にわたる悲劇、喜劇の競演を催していた。[113] この祭の原始的起源は、それが（都市ディオニュシア祭のようにアルコーンによってでなく）バシレウスによって組織されたという事実によって示されている。[114] また『アカルナイの人々』の一節から知られるように、それは外国人の出席しないアテナイ人のみを対象にした親密な演劇祭であった。[115]「レーナイア」という名称の由来については、それを葡萄酒の大桶（lenos）と結びつける説もあったが、今日ではそれをメーナド（Μαινάδες. Maenads. バッコスの巫女または女性崇拝者）を意味するイオニア方言のレーナイ（Λῆναι. Lenai）から引出すのが通説である。[116] メーナドはバッコスを求めて踊り狂う女たちであり、彼女らがテュルソス（thyrsus. 木蔦を巻いたバッコスの杖）や楽器（二重笛、タンバリン、カスタネット）をもって乱舞する様は壺絵に多く描かれている。また、壺絵に見られるディオニューソス・レーナイオスの像は、直立した柱状の棒に衣装をかけ、それに髭の生えたディオニューソスの仮面を付けたものであった。[117] 中央に据えられた神像の傍に大きな葡萄酒の瓶をおき、それから葡萄酒を計って汲みだしている女性神官の姿も描かれている。[118] これらの赤像式壺絵は、メーナドとサチュロス（Satyros. 野蛮な男性の形で表わされる山野の精）とのオルギアといった想像的なものでなく、女性たちの現実の祭を芸術的に筆写したものであるという印象を与える。[119]

次に、ガメーリア祭（Γαμηλία. Gamelia）は、ガメーリオーンの月の二七日に行われた。[120] これはゼウスとヘーラーの「聖結婚」を祝う祭で、テオガミア祭（Teogamia）またはヒエロス・ガモス祭[121]（Hieros Gamos）とも呼ばれた。しかし、これをたんに結婚の守り神としてのヘーラーの祭であるとし、専ら婦人によって祝われたとする見方がある。ガメーリオーンという月名も「結婚する、結婚の宴、結婚」（γαμέω, γαμηλία, γάμος）などの語とともに、この祭名から来ている。この頃は人間的次元でも結婚に好都合な季節であったし、生命が春の息吹を感じていたとされる。

ただし、祭の詳細は何ら保存されていない。[122]

注

(97) Parke, op. cit., p. 95.

(98) Mikalson, op. cit., p. 86. ジーモンはポンパイア祭をカレンダー・フリーズにおける耕作と種まき――マイマクテーリオーンの月の主要行事――の図柄と結びつけ、ドイブナーは新しく蒔かれた穀物の魔術的保護を目的とする祭りであるとする。Simon, op. cit., p. 14; Deubner, op. cit., pp. 157-158.

(99) Parke, op. cit., pp. 95-96. Simon, ibid.

(100) Mikalson, op. cit., p. 89. Parke, op. cit., p. 97. IG I² 190; IG II² 1367.

(101) Herodotus, VI, 87. 邦訳、二八七頁。またヘロドトスはイオニア十二市が同盟を結んでミュカレ岬の山にパニオニオン（全イオニア神社）を設けたこと、それはポセイドーンの聖域であったことを伝えている（Herodotus, I, 142-148）。パークは、イオニア世界の至る所でポセイデオーンの月と彼を賛える祭りが見出されるが、それがつねに冬であったかどうかは立証できないという（Parke, ibid.）。

(102) Parke, op. cit., pp. 97-98.

(103) しかし、麦の収穫期は夏であるから、冬になってからの脱穀祭はありえず、ハローア祭は脱穀の祭りではない。この点、ジーモンはデルフォイ、エレウシス、その他のギリシアの聖域における円形の集会場所がハロースと呼ばれていたこと、また村の円形の脱穀場は舞踏のための理想的な場所であったことを指摘して、この祭名の説明としている。Parke, op. cit., p. 98. Simon, op. cit., p. 35.

(104) Deubner, op. cit., p. 65, & plate 3. 3. Parke, op. cit., p. 99. John Boardman, *Athenian Red Figure Vases The Classical Period*, Thames and Hudson, 1989, 213: Pelike by the Hasselmann Painter (London E 819).

(105) Parke, op. cit., pp. 98-100. Simon, op. cit., pp. 35-36.

(106) Mikalson, op. cit., p. 97.

(107) *Athenaion Politeia*, LIV, 8; Loeb, p. 148. Rhodes, *Commentary*, p. 611.

(108) Parke, op. cit., p. 103.

(109) Aristophanes, *The Acharnians*, 238-262; Loeb, I, pp. 26-29. 『ギリシア喜劇I』、二二―二二頁。

(110) Mikalson, op. cit., p. 110.

(111) Parke, op. cit., p. 104. Hesychius s. v. *ληναίων*, *Hesychii Alexandrini Lexicon*, ed. M. Schmidt, III, p. 35.
(112) Simon, op. cit., p. 100.
(113) Parke, op. cit., pp. 104–105.
(114) *Athenaion Politeia*, LVII, 1. 邦訳、九六頁。
(115) Aristophanes, *The Acharnians*, 504; Loeb, I, p. 50. 『ギリシア喜劇 I』、三五頁。
(116) Parke, op. cit., p. 105. Simon, ibid.
(117) Boardman, *Athenian Red Figure Vases The Classical Period*, 233: Oinochoe by the Eretria Painter (Athens, Vlasto). Boardman, *Athenian Red Figure Vases The Archaic Period*, 311: Cup by Makron (Berlin, Staatliche Museen 2290).
(118) Boardman, *Athenian Red Figure Vases The Classical Period*, 24: Stamnos by the Villa Giulia Painter (Boston, 90). ibid., 177: Stamnos by the Dinos Painter (Naples 2419).
(119) プルタークによれば、ディオニューソスに献身するデルフォイの婦人たち――テュイアデス（Thyiades）と呼ばれる――は、冬パルナッソス山へやって来て吹雪に捕えられてしまった。彼女たちを救出するために遠征隊が派遣されねばならなかった（Plutarch, *Moralia*, 953 D; cf. Pausanias, X, 32, 7）。アテナイの婦人たちの団体はデルフォイの婦人たちと一緒の祭を行うために二年毎にデルフォイへ行ったものである。だから、アテナイにはメーナドが組織された団体として存在しており、冬に恍惚状態の舞踊を催したということが認められる。Parke, op. cit., pp. 105–106.
(120) Mikalson, op. cit., pp. 106–107. なお、エルキアの祭暦ではこの日（二七日）ヘーラーに羊の供犠、またヘーラーの聖所でゼウス・テレイオス、ポセイドーン、およびクーロトロフォスへの供犠が行われる。
(121) Simon, op. cit., p. 16. なお、トリコスの祭暦ではこの祭名（Ἱερωι Γάμει）の下に、ヘーラーは成獣の供犠を受けている。
(122) Mikalson, op. cit., p. 189. Parke, op. cit., p. 104.

おわりに

前一世紀後半におけるアテナイの外港ペイライエウスの状態について、ストラボンはその観察したところを次のように記した。――「この城壁に引きつづいてアテナイ市域から海の方へ伸びた二肢の城壁があった。これが長壁でその長さ四十スタディオン（七・二キロ）、市域とペイライエウス港を結ぶ。度重なる戦で城壁とムニュキア砦は崩れ落ち、ペイライエウスはその居住地も小さくなって、三港と『安泰加護のゼウス』の神域のまわりだけになった。神域には、小柱廊の何れにも驚嘆すべき壁画があって名高い画家たちの作、野天に諸像がある。長壁も根こそぎ崩れてしまったのは、以前にはラケダイモン勢、その後にローマ勢が破壊したためで、後者の戦ではスラがペイライエウスとアテナイ市域を共に包囲戦の末に攻略した。」[123] ポリスとしての政治的自立を失い民主制の伝統も失われたアテナイにおいて、外国からの旅行者の目を引いたものはただ寂れた神殿とそれを飾るくすんだ芸術作品であった。アテナイはたしかにそうした過去の記念物を大量にもっていたし、それらの源泉となった様々な宗教祭祀は、外国の政治的支配下にあってもなおしばらくの間は生き延びていた。例えば、エレウシスの秘儀はヘレニズム時代からローマ時代に入って、キリスト教が公認された後も残存していた。エレウシスがついに荒廃したのは、三九五年にゴート人アラリックの大軍がギリシアに侵入したときであった。[124] また、パルテノン神殿のアテーナー・パルテノス像を、二世紀後半にパウサニアスはまったく完全な姿で見ていた（この巨大な像は祈願の対象というよりも宝物というべきものであったが）。しかし、四二六年に東ローマ皇帝テオドシウス二世の命じた異教殿堂破壊令の結果この金象牙像は掠奪され、パルテノンはハギア・ソフィア（Haghia Sophia）の名でキリスト教教会に変えられた。[125] キリスト教世界の揺るぎない確立とともに古代の多神教は滅び、ポリスの祝祭は微かに痕跡の残る過去の失われた記憶となった。

アテナイの宗教祭祀の概要は古代の文献を通してわれわれの知るところとなったし、大理石碑文の断片が時折、部分的にやや詳しい情報を与えてくれる。一般にギリシア人は、近代人よりもはるかに豊かに神の顕現（テオファニア）を体験し、神々や英雄のような非日常的な神性を間近に感じて生活していた。彼らは神的なものがどこで、どのように表われようとも、そのままにその栄光に敬意を表わした。彼らの公的空間には聖域や神殿が立ち並び、彼らの生の時間には供犠や祭（ἱερά, θυσία）が不可欠な要素として入り込んでいた。その共同体の土地への神の最初の到来は、永遠の記念として行列や祭式で繰り返し再現された。アテナイ・ポリスの場合、マイカルソンによるカレンダーの研究が実証したように、その公的生活の暦は相互に関連した神聖な要素と世俗的な要素との統一として存在していた。聖なるものと俗なるものは古代のアテナイ人の生活においてたいそう緊密に織りなされていたので、その一方を欠いて、もう一方を考察することは誤謬への道を開くだけであった。市民たちの公的活動の中心は民会、評議会における政治的意志決定であるとしても、その活動のかなりの部分はポリスの定めた祝祭の実行に当てられていた。アテナイのカレンダーにおいて、祭日として実証されうるものは年間で一二〇日、実に一年の日数の三三パーセントに及ぶ。[126]

アテナイ・ポリスの祝祭（ἑορτή）の中には、祭の開催された時期（月日）が依然として不明なものがある。それらにごく簡単にふれると、次のようである。[127]——

プロメーテイア祭（Prometheia）。この祭りでは松明競技が行われた。神話において、プロメーテウス（Prometheus）は天上の火を人間にもたらしたとされる。ギリシアの他所はともあれ、アテナイにとってプロメーテウスは特別な神であり、郊外のアカデーメイアの神域にプロメーテウスの祭壇があった。

アナケスの祭（Anakes）。ディオスクーロイ（ゼウスの息子たち）・カストールとポリュデウケースの祭である。彼らを「アナケス」（君侯）と呼ぶのは、アテナイ人のみである。中心市にアナケスの神域があり、祭も行われた。星座としては双子座（Gemini）に当たり、航海の保護者としても信仰された。

エピクレイディア祭（Epikleidia）。アテナイでのデーメーテールの祭日であって、この名称は「鍵」さらには「秘儀」と言語学的に関連があるだろうといわれる。

ガラクシア祭（Galaxia）。神々の母を讃えての祭日であって、ガラクシアと呼ばれる大麦で作ったミルク粥を炊く（γάλα. ミルク）。なお、この祭はデロスでは月名となっており、それはアテナイのエラフエーボリオーンの月に当たる。

テオイニア祭（Theoinia）。ディオニューソスのためのこの祭祀は特別な聖所をもっていたと考えられるが、不明である。バシレウスやバシリンナやゲラライ（Gerarai）と呼ばれる婦人たちが儀式に参加した（アンテステーリア祭のときのように）。アイスキュロスの失われた作品の中で、ディオニューソスは「父テオイノス」（葡萄酒の神）と呼ばれている。

ブラウロニア祭（Brauronia）。アッティカの東側海岸ブラウロン（Brauron）を中心地とするアルテミス・ブラウロニアの祭祀で、四年毎に大祭があった。アテナイの少女たちは一定期間ブラウロンで黄色い衣を着て熊乙女（アルクトイ）として過ごした。また、アテナイのアクロポリスの上にその支社があり、祭祀用容器（krateriskoi）の出土が多い。[128]

さて、アテナイ・ポリスの祝祭を考察する場合にどのようなことが指摘できるであろうか。本稿でわれわれが行なってきたことは、先ず何よりもそれを全体として見通しが利くようにすること、すなわち、アテナイの年間の祝祭を季節毎にまとめ、月日を追って総体的に捉えうるようにすることであった。ポリスの祝祭を理解する方法には種々のアプローチが考えられようが、その一つは、季節毎の主要な祭を市民生活との関連で把握していくことであろう。例えば、アテナイの数多いの祝祭の中では、春（アンテステーリオーンの月）の都市ディオニュシア祭、夏（ヘカトンバイオーンの月）のパンアテーナイア祭、および秋（ボエードロミオーンの月）のエレウシスの大秘儀祭が最も盛大で

あって、しばしばアテナイの三大祭といわれる。その他にも、本稿で見てきたように、各季節のそれぞれに特徴のある主要祭祀が配置されていることは明らかである。また、およそ数カ月の間隔をおいて、ある一柱の神へ二つの祝祭が捧げられている例が幾つか見出される。アポローンに対する初夏のタルゲーリア祭と晩秋のピュアノプシア祭、アスクレーピオスに対する春のアスクレピエイア祭と秋のエピダウリア祭などがそうした例である。もっとも、本稿では古典期から見て、この時期を通じて遵守され続けた大部分の祭祀とともに、すでに廃れて名目のみになった幾つかの祭祀やこの古典期に導入される新しい祭祀を、同じ年間のカレンダー上に位置づけている。そのため、仮に古典期のある特定の年度を取り上げる場合、国家祭祀としてマイナーなものや既に消滅したもの、あるいは近未来に導入されるべきものが、ある年度の一連の主要な祭祀の連続の中にその影を映すことになる。しかし、過去の、長い時期にわたって継続された諸々の祝祭を年間のカレンダーとして取上げる以上、それは避けられないことであろう。しかも、ポリス内外の政治情勢の変化や戦争・疫病が原因となって、廃れたはずの祭祀が復活したり、外来の祭祀が政策的に新たにポリスに導入されたりすることは、しばしば起ったのである。

次に、ある特定の神や英雄毎に、その神性に捧げられた諸々の祭祀の性格――祭祀名と祭神、日時、場所、犠牲と価格、祭の執行者と役得、祭式など――を検討する方法がある。アテナイの三大祭はそれぞれアテーナー・ポリアス、デーメーテールとコレー、およびディオニューソス・エレウテレウスのための祝祭であって、これらの神々のためには他にも多数の祭祀が行われている。また、ゼウス、アポローン、アルテミスについても複数の重要な祭がある。それに次ぐのは、アプロディーテー、ヘーパイストス、ポセイドーン、ヘーラーの祭祀であろう。なお、オリュンポス十二神のうち、ヘルメース、アレースについては、アテナイ・ポリスをあげての大きな祭りは存在しないようである。オリュンポス神以外の神々の祭としては、アテナイではクロノス、プロメーテウス、パーン、アスクレーピオス、エロース、ベンディスの祭が顕著である。また英雄崇拝の祭典として、テーセイア祭、ヘーラクレイア祭があるのは当

然といえようが、しかし、他のヘーロースやヘーロイネーのために特に目立った祭祀は存在しないようである。それ以外のある事柄の記念祭や抽象名詞（擬人神）の祭祀として、シュノイキア祭、エイレーネー祭、ニケーテーリア祭、ゲネーシア祭、デーモクラティア祭、アパトゥリア祭などがある。

しかし、さらに別のアプローチとして、ある特定の祭祀の成立やその祭祀の共同体への導入の時期に着目することも可能である。すなわち、それが大変古いものか、比較的新しいものか、に注意を払う方法である。例えば、アテナイ・ポリスの幾つかの祭式は、考古学的にミュケーナイ時代の政治や宗教との関連を呼び起こすし、他の幾つかの祭式は石器時代における人間の狩猟生活や農耕生活に由来すると考えられている。しかるに、ある祝祭は比較的新しくて古拙期（前八世紀頃）のものと推定され、別のある祝祭は古典期になってから何らかの理由で政策的に導入された、といった具合である。古い祭祀の中にはいわば化石化して目立った祭も行われなくなり、名称以外によく分からないものも見受けられる。

最後に、それぞれの祝祭のもつ社会的性格や政治的意義を考察することが大切であろう。その場合、祝祭が王制的あるいは貴族制的なものであるか、それとも民主制的あるいは大衆的なものであるかとか、少数の氏族しか参加しない伝統墨守型か、それとも広く大衆が参加して宴会や競技会を楽しむ消費型のものかといった点に関心を払いつつ、各祝祭の型を特徴づけることになる。もちろん、パンアテーナイア祭のように伝統的祭祀でありながら、アテナイ市民あげての盛大な祝祭となった型があることはいうまでもない。しかし、例えばアクロポリス上でのアレーフォリア祭が少数者しか参加しない貴族制的な祭祀の典型であったとすれば、それと対照的にポピュラーな新しい祭祀の多くは大衆参加の消費型の祝祭であったとされるのである。

注

(123) Strabo, IX, 1, 15; Loeb, IV, p. 260. 飯尾訳、I、七三一頁。
(124) Parke, op. cit., p. 71.
(125) ロコリ『ン、前掲、七九頁。
(126) Mikalson, op. cit., pp. 186–204.
(127) Cf. Parke, op. cit., pp. 171–174.
(128) Parke, op. cit., pp. 139–140. Simon, op. cit., pp. 83–88.